年間を通じたゲルと固定家屋の利用実態

中国・内モンゴル自治区東ウジムチン旗における牧畜民の定着化と居住環境変化

ACTUAL USAGE OF FIXED HOUSES AND “GER” THROUGHOUT THE YEAR

Settling and changes of living environments of pastoralists in East Ujimqin Banner, Inner Mongolia, China

野村理恵*, 中山 徹**

Rie NOMURA and Toru NAKAYAMA

This paper analyzed the changes of living environments by the settling of Mongolian people focusing on the separation of fixed houses and Ger. 1) Because the clear borderlines were drawn between each households' land in the 1980s, the travel distances have drastically decreased from some hundred kilometers to some kilometers. 2) Within the limited pasture areas, the location of fixed houses and how often and when they temporarily move are determined in view of problems such as population growth, grass damage and fountainhead lack. Ger was, therefore, used during all seasons on the short- to long-term based although fixed houses are pervasive throughout the region. 3) Both tendencies were found at the same time; reduction and simplification of Ger utilization and possession and application of traditional Ger due to the settling.

Keywords : Ger, Mobile pasturage, Settlement, Inner Mongolia

ゲル, 移動放牧, 定着化, 内モンゴル

1. はじめに

1-1. 研究の目的

本論は、中国・内モンゴル自治区のモンゴル族牧畜民を対象とし、定着化に伴う居住環境の変化について、移動住居であるゲル^{注1)} *ger* と固定家屋であるバイシン^{注2)} *baising* の利用実態及び使い分けに着目して明らかにすることを目的とする。

内モンゴル自治区における牧畜民の定着化は、農耕化、漢族の流入等の影響により徐々に進行し、特に中華人民共和国成立以降は大躍進政策、人民公社化運動、改革開放政策等に基づく生産体制の変化により大きく加速した。しかし、定着化の進度や過程は自治区内でも地域によって異なる。本論では、1980年代の改革開放政策以降に定着化が本格化したものの、現在でもゲルを使用した移動放牧が行われている地域において、短期間で急変を遂げるモンゴル族の居住環境について考察する。

1-2. 分析の視点と方法

これまでに、ゲルの利用実態と用途変化に関して、ゲル利用の盛んな地域において広域調査を実施した^{注3)}。その結果、多様な移動放牧の形態が出現しており、ゲル利用の縮小が一様に進んでいるわけではないということが確認できたが、年間を通じた移動放牧の形態と住居の利用実態について詳細が把握できていなかった。そこで本論では、調査地の範囲を限定するとともに、四季を通じての調査事例を増やし、より詳細な資料収集と分析を加えるを試みる。

まず、調査地の放牧形態の変遷と現状を整理、分類する（第2章）。

次に、調査地でのゲル及びバイシンの所有状況を整理し（第3章）、さらに年間を通じた放牧形態と住居の使い分けについて分析し（第4章）、第5章でまとめとする。

1-3. 調査概要

調査地は、シリングル *sili yin yool*（錫林郭勒）盟・東ウジムチン *Jegün ujimučin*（东乌珠穆沁）旗・ガタブチ *qabtabači*（嘎达布其）鎮・バインジラガ *bayanjilay_a* ガチャ^{注4)}（白音吉力嘎查）である。シリングル盟は、自治区全体のなかで、モンゴル族の割合が高いことや放牧可能な牧草面積が広いことから定着化の進度は遅く、現在でもゲルの利用が確認できる地域である。特に東ウジムチン旗はシリングル盟で最大の面積を有している（約4.7万km²）。人口の約72%をモンゴル族が占めており^{注5)}、農耕化の影響も少ない為、調査地に選定した。更に限定した行政区域（ガチャ）については、旗の政府関係者に依頼し、調査許可の下りた地域での実施となった^{注6)}。バインジラガガチャは、旗の行政公署ウリヤスタイ *uliyasutai*（烏里雅斯太）鎮の北方約60kmに位置する（図1）。モンゴル国との国境に程近く（国境まで約10～13km）、129世帯の村である。ガチャのなかで、漢族の3世帯を除きモンゴル族世帯のゲル所有率は100%、このうち1年に1回以上使用している世帯は約半数である。

第一次調査は2008年9月8～10日、20～22日で、調査地の選定及び地域概要について政府関係者より情報を得た。調査世帯の紹介も政府関係者同行のもと行われ、聞き取り及び実測調査を実施した。第二次調査は2009年2月24～26日に実施し、冬季のゲルの使い方

* 奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士後期課程

** 奈良女子大学大学院人間文化研究科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ.
Prof., Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ., Dr. Eng.

に着目する為、ゲルを利用している世帯に絞って聞き取りを行った。第三次調査は2009年6月15～17日で、夏季の放牧に使用するゲルを中心に聞き取り及び実測調査を実施した。第四次調査は、2009年9月19～22日で、バイシンを中心とした聞き取り及び実測調査を実施した。上記4度にわたる調査^{注7)}で、調査世帯の総数は36世帯である。

図1 調査地位置図

2. 放牧形態の概要とその変化

ここでは、聞き取りで得た資料に基づき、調査地での放牧形態とその変化について記述する。

2-1. 四季移動と牧畜サイクル

伝統的なモンゴル族の遊牧は、地域差があるものの、大まかには春・夏・秋・冬という四季によって宿営地を移動する。調査地における牧畜サイクルは、2月末～3月頃にピークを迎える家畜の出産期を春営地で過ごし、その年産まれた家畜が成長する5月下旬から6月初旬頃に夏営地へと移動する。夏営地では主に搾乳と毛を刈る作業がある。9月頃になると、冬に備え、干し草の確保と家畜を太らせる為のオトル^{otor}と呼ばれる臨時的な移動を繰り返す。11月末頃には季節風を避ける場所など地形や雪の量、牧草の様子をみて冬営地へ移動する。初雪が降ってから移動する場所を決めるという世帯もある。

2-2. 移動放牧の変化

調査地では1980年代以前、明確な牧地の境界は無く、牧草と水の様子をみて頻繁に移動が繰り返されていた。四季の宿営地を拠点としながらも、1年に10回以上、多い場合は1～2日ごとに移動し、2週間も同じ場所には留まらなかったという世帯もある。移動距離も様々で、各宿営地間は30～50kmほど、場合によっては約300km離れた場所まで移動することもあった。移動手段は専ら牛車で、各世帯7～10台ほど保有していた。

人民公社の解体に伴い、1983年頃から段階的に家畜が各世帯に分配された。その際、牧地についても使用権の分配が始まり、長距離移動及び頻繁な移動は減少した^{注8)}。この頃から固定家屋であるバイシンも少しずつ建築されはじめる。それでもまだ、ゲルを利用して四季を通じた移動をする世帯は多かった。

その後牧地の測量が厳密となり、1996年頃から使用権が30年契約で再分配された。牧地の境界を柵で囲う世帯が増え、自由な移動放牧は事実上消滅した。畜舎、さらには住居としてバイシンを建築する世帯が急増し、番地も与えられた。これを機に定着化が一気に加速することとなる。

また、2003年からは「退牧還草」政策に伴い「囲封転移戦略」が

展開され始めた^{注9)}。東ウジムチン旗では2008年時点で、利用可能な草原面積のうち約78%で春季休牧、約29%で区画輪牧、約13%で禁牧が実施されている。調査地では禁牧世帯はないものの、毎年4月頃に20～30日ほどの期間、限られた範囲内での放牧が義務付けられ、一部で、区画輪牧が実施されている。これは、畜舎や柵など固定化拠点の設置が進む要因となっている。

2-3. 現在の放牧方法

調査地において、各世帯に分配されている牧地面積は、分配時の世帯人数に比例するが、概ね7000～10000畝(mu:1畝=666.7㎡)程度が一般的である。区割り様々だが、1辺が2～3km程度の規模である。兄弟でさらに分割し、1世帯あたり2000～5000畝程度になっていることもある。このなかで井戸、畜舎、住居の固定化拠点を設ける。また、区画を分けて放牧する「輪牧」の形態が推奨されている。但し、牧地内の区分けは各世帯により異なっており、どの季節の営地を柵で囲うか、1年を何季に分けるかなどは世帯に任されている。区画を定めておらず、毎年様子をみて使い方を決めるという世帯もある。

増加しているのは、借用地である。分配された区域以外にも牧地を借りて放牧面積を増やしている世帯が、21世帯確認できた。借用地を必要とする理由として、以下の3つが考えられる。

1つ目は、内モンゴル全体で進行している沙漠化の影響で、牧草の状態が年々悪化しており、限られた牧地内では十分な牧草を確保できないという問題である。その場合、比較的牧草の状態が良い牧地を借りて移動する。大半の事例がこの理由によるものである(事例1・2・4・5・12・14・15・22・25・31・35)。毎年決まって牧地を借りる常時契約と、牧草の様子から必要な時に借りる臨時契約がある。

2つ目は、牧地の再分配後に婚姻などで増えた世帯が、兄弟・親戚間でさらに牧地を分配し、輪牧するのに十分な面積を保有していない場合である。(事例10・11・13)

3つ目は、牧畜業の経営拡大である。働き手不足や、子どもの就学等の理由より牧畜業を辞めて都市部へ出た世帯の牧地や家畜を請負う場合、また分配された牧地だけでは飼うことが難しくなった馬等の大型家畜を集約して保有するという例もある(事例8・29)。

牧夫の雇用も増えている。本調査では10世帯で雇用が確認できた。牧夫についても様々な例があり、人手不足の時のみ臨時で雇う場合と、常時放牧を任せる場合がある。

2-4. 放牧形態の分類

以上より、現在の放牧方法として、固定化拠点を設け、そこから分配された区域内での短距離移動、あるいは借用地への中・長距離移動を行うというパターンが確認できる。また、日帰り放牧をする場合と、季節営地に放牧拠点を設ける場合がある。

オトルとは家族全体の季節移動とは別に、「一部の者が、一部の家畜を連れて、一時的に移動する分派的な移動」を表わす言葉として知られている⁷⁾。秋の家畜を太らせるシーズンや、旱魃・雪害から家畜を守る為に行われることが多い。現在調査地では、季節や移動距離、移動を担う人、移動期間を問わず、畜舎や住居のある固定化拠点とは別の場所に、放牧拠点となる住居を設ける場合、その放牧拠点への移動をオトルと呼んでいる。

調査地の移動放牧の形態を分類すると、これまでの研究³⁾におい

表 1 調査事例の牧畜業に関する基礎情報と住居概要

事例	世帯人数 (ガチャ居住者)	牧地			牧夫の 雇用	委託放牧 の有無	家畜の数 単位：頭				ゲル 所有数	ゲルの用途				バイシン建築 年	バイシンの場所（営地）			
		牧地面積 単位：畝	備考	借用地			馬	牛	羊	山羊		生活・ 長期放牧	短期放 牧	行事	牧夫が 使用		冬	春	夏	秋
1	6(6)	6950		臨時	無	無	2	30	300	1		▲	●			2007			■	
2	5(4)	5000		臨時	無	無	—	—	—	1		●	●			2000		■		
3	3(3)	9000		無	無	無	10	—	—	1			●			2008		■		
4	4(2)	9000		臨時	常時	無	10 以上	30	500	1		●	●	●		1986 → 1992			■	
5	5(2)	8000		臨時	臨時	無	数頭	20 以上	—	1	●	▲	●			2001		■		
6	6(3)	—		無	無	無	—	—	—	2		●	●			1998		■		
7	4(4)	—		無	無	無	数頭	5	—	1		◎				1990		■		
8	7(5)	8000	借用地 4000 含む	常時	無	無	3	60	800	1		●	●			1999			■	
9	5(3)	10000		無	無	無	数頭	0	600	1		●	●			1990 / 1999			■	
10	4(3)	5000		常時	無	無	3	30	200	1		●	●			2003		■		
11	4(3)	5000		常時	無	無	2	10	300	1		●	●			2007		■		
12	4(3)	9000	借用地 3000 含む	常時	無	無	2	0	500	1		●	●			2004	—	—	—	—
13	4(4)	2000		常時	無	無	0	0	300	1		●	●			2004			■	
14	4(4)	8635		常時	臨時	無	0	14	200 以上	1		●	●			1999			■	
15	4(4)	10000		常時	無	無	0	0	600	2	●		●			1999		■		
16	7(4)	9500		無	無	無	0	0	500	1	●		●			1980 年代		■		
17	7(4)	17000		無	無	無	0	17	400	2	●	●	●			2000		■		
18	2(2)	7565		無	臨時	無	0	数 10 頭	60	0	1		●	●		1987		■		
19	5(2)	—		無	無	無	—	—	—	1	●	▲	●			2006 (畜舎)		■		
20	5(2)	10000		無	臨時	無	—	—	—	2		◎	●			1998 → 2005	■			
21	4(2)	7500		無	常時	無	数頭	数 10 頭	1000	2		◎	●	◎		1994 / 1998			■	
22	4(1)	10000		常時	常時	無	数頭	20	600	2		◎	●	◎		1994			■	
23	4(2)	8900		常時	無	無	2	20	600 以上	1		◎				—		■		
24	3(2)	—		常時	無	無	—	—	—	1		●				—		■		
25	3(2)	14000	借用地 5700 含む	常時	無	無	10 数頭	30	600	1	◎					1998		■		
26	3(3)	—		—	無	無	5	20	500 以上	1		●				2006		■		
27	2(2)	10000	兄弟 3 人 分	無	無	無	0	0	200	1	◎					1991		■		
28	4(1)	10000	兄弟 3 人 分	無	無	無	10	0	500	1		◎				1999		■		
29	5(3)	13000		臨時	無	有	100	20	1000	2		◎	●			2001			■	
30	5(3)	9900		無	無	無	2	34	500	2		◎	●			2000 → 2007		■		
31	2(2)	9066		常時	無	無	0	42	350	1		●	●			1991 → 2005			■	
32	4(2)	10000		臨時	無	無	0	90	400	1		●	●			1993 → 2000	—	—	—	—
33	3(2)	14000	兄弟 2 人 分	常時	無	無	4	20	400	2	●		●			2009		■		
34	4(2)	9000		常時	常時	有	10	23	400	2			●	◎		1996		■		
35	4(3)	12000		臨時	常時	無	20	15	500	2			●	◎		1982 → 2000		■		
36	3(2)	8000		無	臨時	無	2	0	500 以上	1		◎		◎		2003			■	

●：木製ゲル ◎：鉄製ゲル ▲：簡易ゲル ■：バイシンの位置 —：不明

て、家畜群の移動の有無（オトルの有無）、家畜所有主の移動の有無、放牧の担い手に基づいて分類したタイプ A～E に加え、放牧拠点の場所（移動先）についても家畜所有主の牧地内（Ⅰ）か借用地（Ⅲ）か、あるいはいずれにも構えるか（Ⅱ）という点に着目する。AⅠ～EⅢまでの分類について調査事例を当てはめると表 2 のようになる。タイプ E に属し、オトルは実施せず日帰り放牧のみという事例も 3 事例あるが、多くが必要に応じてオトルを実施しており、家畜所有主の移動を伴うオトルが半数以上を占めている。

ここで、特筆すべきはタイプ D である。家畜を別の牧畜民に委託する場合、既往文献ではその委託先の牧畜民が配分を受けている牧地において放牧が実施される例が示されている⁸⁾。調査地ではそのような例に加え、放牧拠点の場所についてはさらに複合的な事例がみられる。家畜所有主に配分されている牧地、あるいは借用地を合わせた場所で、家畜を別の牧畜民に委託するという事例である（事例 29・34）。委託先の牧畜民は親族や近隣住民であることが多く、その場合は放牧場所が委託先牧畜民の配分された牧地も含めて広がる。これは、シリングル盟の他地域でも確認されている方法³⁾で、牧地と労働力を相互に有効利用しており、労働力不足や草原の悪化等への一つの対応策である。

表 2 移動放牧の形態

家畜群の 移動	家畜 所有主の 移動	放牧の担い手	タイ プ	放牧拠点の場所		
				家畜所有主の 牧地内	両方	借用地
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
有	有	家族 (世帯全員)	A	AⅠ 6 7 9 16 17 19 26 27 30	AⅡ 15	AⅢ 4 5 11 13 22 23 24 25 31 32 33
		家族 (世帯の一部)	B	BⅠ 19 21 28 36	BⅡ 1 2 8 29	BⅢ 12 13 14 20 32
	無	牧夫を雇用	C	CⅠ 21 36	CⅡ 34	CⅢ 4 5 20 22 35
		別の牧畜民に 委託	D	DⅠ —	DⅡ 29 34	DⅢ —
	無	—	E	EⅠ 3 18	EⅡ 10	EⅢ —

AⅠ～EⅢ：タイプ番号 1～36：調査事例番号

3. 住居の所有状況と使用事例

ここでは、調査地における住居の所有状況を整理し、主にゲルの使用事例を紹介する（図 2）。

図 2 ゲル及びマイハンの概要

3-1. ゲルとパイシンの所有状況

調査事例では全世帯がゲルを所有している。その用途は主に放牧（オトル）であるが、長期（半年以上）あるいは短期（半年未満）の使用がある。かつては木製ゲルが大半であったが、2000 年代後半に入り、鉄製ゲルが急速に普及している。この鉄製ゲルは、定着化のなかで、世帯全員ではなく一部の臨時的な移動の際に使用するオトル用の簡易ゲルとして増加し始めた。

調査世帯で現在使用されているゲルは、すべてウリヤスタイ鎮のゲル専門店より購入したものである。シリングル盟で流通している

ゲルの多くは工場で生産されており、各地に注文を請負う店が存在する。ここで大きさや色彩等を指定してオーダーメイドする。2000 年代に入ると、鉄製ゲルの販売が始まった。各地の小売店で簡単な溶接が可能で、直接購入できる。30 年ほど前までは牧畜民の自家製のゲルや家具、構造材を覆うフェルト、紐などの小物がみられた。調査事例のなかには、伝統的な家具等の製作技術が引き継がれている家系もあったが（事例 4・32）、現在は工場生産されたものが主流である。

1 世帯で 2 つのゲルを所有し、1 つはオトル用、1 つは行事用と、

用途によって専用に行っている事例も多い。その場合、オトルには鉄製あるいは古い木製のもの、行事には木製ゲルを使用する。祭事の際には当番の世帯がゲルを建て、客人をもてなす。調査地では伝統行事が頻繁に行われており、そこで見栄えの良い伝統的な木製ゲルを用意できるよう新調する事例（事例30）や、普段の放牧には使用せずにメンテナンスを施している事例（事例3・10・18）もある。

パイシンについては、1990年前後から導入が始まり、現在ではほぼ100%が固定化拠点にパイシンを建築している。大工は主に家畜の売買の為に当該地域を行き来する漢族の紹介によって決まることが多い。ウリヤスタイン鎮に限らず、他地方から営業に来る大工もいる。

3-2. 使用されているゲルの事例と特徴

ここでは、調査地で実際に使用されていたゲル及び簡易テント^{注10)}の概要と特徴を事例とともに示す。

1) 生活用（長期オトル）のゲル

事例19では、2006年、固定化拠点に畜舎を建築したが、居住用のパイシンは所有しておらず、実質一年中ゲルで生活している。20年以上前、夫妻が結婚した際に譲り受け、家族5人で使用していた。現在は娘2人が独立し、3人で住んでいる。中央に炉を配し、周りには3枚の床板、フェルト、絨毯を重ねている。5枚の壁材（ハナ）を使用しており、この地域では一般的な規模のゲルである。

2) 鉄製オトルゲル

鉄製ゲルは14世帯が所有しているが、いずれも2000年以降、大半が2005年以降に購入している。700～1000元（1元≒15円）程度で手に入り、安価であること（木製ゲルの場合5000～12000元程度）、移動に自動車を使う世帯が増えたことが普及に繋がっている。また、牧夫を雇用する場合、鉄製ゲルを牧夫の住まいとすることが多い。

事例7は夏の間オトルで鉄製ゲルを利用する。2007年までは自家製の木製ゲルを使用していたが、古くなり強風で破損した為、新たに購入した。ハナは5枚あるが、木製ゲルよりも小規模である。面積が小さい為、炉を入口付近に寄せ2枚の床板を張っている。夏の間は、暑さをしのぐ為、炉を入口付近へ寄せ、煙突も屋外から突き出るようにしている。

3) 木製オトルゲル

基本的には生活用ゲルと同じ構造になるが、オトルが短期間、あるいは放牧者が少人数である場合、床を張らずに土間のままというゲルがみられる。事例24では、近隣世帯の牧地を借りて委託放牧を請け負っており、ゲルは牧地所有主のものを借りている。床板は張らずに、ベッドで代用している。夏のオトルなので寒さも問題ない。大きな家具はすべて近くにある牧地所有主の家から運んだ。牧地の賃借と同時にゲルの賃借も生じている。

4) 簡易テント

マイハン *maihan* はかつて四季の宿営地から家畜を切り離して臨時に行うオトルで用いられていた断面が三角形になる簡易なテントである。現在このようなオトル自体が少なくなったが、事例19では、生活拠点であるゲルから、さらに臨時オトルを行う際に使用する。家畜の出産シーズンに、仔羊をゲルのある生活拠点からわずか100m程離れた場所に移動させ、この家畜を守る為夜になると家族のうち1人が交代で番をする。マイナス40度を下回ることのある冬に暖房設備のないマイハンであるが、狭い空間でフェルト、毛布を重ねる

と暖がとれる。骨組は家畜囲いの鉄柵、そのうえにビニルシートとゲルに使うフェルトを重ね、飛ばないように石でおさえている。

他にも、聞き取りによると、壁材のハナの部分を使わずに、屋根材のオニをそのまま地面に建てたもの^{注11)}（事例1・5）や、3つのハナで小さな円をつくり、屋根材のオニは使わず、そのままフェルトをかぶせるといった事例もみられる（事例1）。

4. 年間を通じたゲルとパイシンの利用実態

表3では、各事例のオトルの時期と、年間を通じて使用している住居を示している。各事例の列で上段が放牧拠点で使用する住居、下段が固定化拠点で使用する住居である。

4-1. 放牧拠点で使用する住居

まず、放牧拠点で使用する住居に着目すると、ゲルが大半を占めており、簡易テントとパイシンの使用が数事例みられる。使用時期は数か月から一年中まで様々であるが、6か月を超える長期に渡ってゲルを用いてオトルを実施する世帯が12世帯、そのうち8世帯で家畜所有主の家族全員がゲルに居住している（表3）。

さらに、冬季から春季に至るまでオトルでゲルを使用している世帯が21世帯あり、このうち家畜所有主の家族が使用しているのは18世帯である。これには、以下の理由が考えられる。

1つ目は、固定化拠点の位置である。防寒目的や家畜の出産シーズンに合わせて冬・春営地に畜舎と住居を設置する事例が多いなか（春営地にパイシンを建築しているものが12世帯、冬営地が1世帯、冬・春を一つの営地としてそこに建築しているものが10世帯）、一方で、夏営地にパイシンを建築している事例も9世帯ある（表1・3）。これは、パイシンを建築する際、井戸の位置を重要視している為である。牧地の分配によって、それまで共用であった井戸を各自の区域内で設けることが必要となった。井戸が設置できる場所は地形等の制約がある為、固定化拠点の位置決定において重要な要素となる。地形条件や金銭的な問題で井戸を複数設置できない場合などは限られた井戸の傍に固定化拠点を設け、夏営地とする。冬営地では積雪を利用すると、井戸がなくても放牧が可能である。

2つ目は、第2章で述べたように、冬営地として借用地を利用する事例が多いことである。冬季に牧草の状態が良いところや比較的暖かい場所を探してオトルを実施する。

放牧拠点でパイシンを使用している事例9・20・36では、分配された牧地内を区切る輪牧方式を採用しており、夏・冬の営地をはっきりと分けている。毎年ほぼ定まった場所で放牧する為、ゲルの代わりに小規模なパイシンを建てている。

4-2. 固定化拠点で使用する住居

固定化拠点の住居は概ねパイシンであるが、事例17・22・36でゲルとの併用がみられる。事例17は冬・春営地にパイシンを新築したが、主人の部屋としてゲルを併設し、夏・秋営地へ行くときにはそのゲルに家族全員が住む。事例22は、パイシンの塙で囲われた庭の中にゲルを建てている。これは、牧夫が自ら持参したものである。家畜所有主である主人はパイシンに住んでいるが、食事などは共同で生活をしている。冬営地へ行くときには主人もゲルを持って、2つのゲルを放牧拠点に建てる。事例36の固定化拠点のゲルは、倉庫として使用しているものである。冬営地へ行く時には、そのゲルを牧夫の住居とし、主人はパイシンを使用する。

表3 調査事例の放牧サイクルと住居の使い分け

事例	放牧サイクル												オトル の期間 半年 以上	春・冬 に オトル	夏営地 にパイ シン	移動放牧の 形態
	春営地				秋営地											
	冬営地		夏営地						冬営地							
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月				
1	■	■	■	■	■	■	■	■	■	▲ ■	▲ ■	▲ ■		✓	✓	BⅡ
2	■	■	■	■	● ■	● ■	■	■	■	■	■	■				BⅡ
3	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				EⅠ
4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			✓	AⅢ・CⅢ
5	●○	●○	●○	●○	■	■	■	■	■	●○	●○	●○	✓	✓		AⅢ・CⅢ
6	■	■	■	■	●	●	●	●	●	■	■	■				AⅠ
7	■	■	■	■	●	●	●	●	●	■	■	■				AⅠ
8	● ■	■	■	■	● ■	● ■	● ■	● ■	● ■	● ■	● ■	● ■	✓	✓		BⅡ
9	●■	■	■	■	■	■	■	■	●■	●■	●■	●■		✓	✓	AⅠ
10	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				EⅡ
11	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●		✓		AⅢ
12	● ■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	● ■	● ■		✓		BⅢ
13	●	●	●	●	■	■	■	■	■	■	■	■		✓	✓	AⅢ・BⅢ
14	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			✓	BⅢ
15	■	●	●	●	●	■	■	●	●	●	■	■	✓	✓		AⅡ
16	●	●	●	■	■	■	■	■	●	●	●	●	✓	✓		AⅠ
17	■●	■●	●	●	●	●	●	●	■●	■●	■●	■●	✓	✓		AⅠ
18	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				EⅠ
19	▲ ●	▲ ●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	▲ ●	✓	✓		AⅠ・BⅠ
20	■	■	■	■	■	○■ ■	○■ ■	○■ ■	○■ ■	○■ ■	■	■				BⅢ・CⅢ
21	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○● ■	○● ■	○● ■	○● ■	○ ■	○ ■	✓	✓		BⅠ・CⅠ
22	●○	■○	■○	■○	■○	■○	■○	■○	●○	●○	●○	●○		✓	✓	AⅢ・CⅢ
23	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●	●		✓		AⅢ
24	■	■	■	■	●	●	●	●	■	■	■	■				AⅢ
25	●	■	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	✓	✓		AⅢ
26	■	■	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●		✓		AⅠ
27	■	■	■	●	●	●	●	●	●	■	■	■	✓			AⅠ
28	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*				BⅠ
29	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			✓	BⅡ・DⅡ
30	●	■	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●		✓		AⅠ
31	●	●	■	■	■	■	■	■	■	●	●	●		✓	✓	AⅢ
32	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*				AⅢ・BⅢ
33	■	■	■	●	●	●	●	●	●	●	●	■	✓	✓		AⅢ
34	■	■	■	○	○	○	○	○	○	■	■	■	✓			CⅡ・DⅡ
35	■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	○ ■	✓	✓		CⅢ
36	○■	■●	■●	■●	■●	■●	■●	■●	■●	○■	○■	○■		✓	✓	BⅠ・CⅠ

●：ゲル（家族が使用） ○：ゲル（牧夫が使用） ■：パイシン ▲：簡易テント * 不定期 ✓：該当 網掛け：オトルの期間

移動放牧の形態は表2参照（放牧の担い手が A：世帯全員 B：世帯の一部 C：牧夫 D：別の牧畜民に委託

放牧拠点 I：家畜所有主の土地内 III：借用地 II：両方

5. おわりに

5-1. まとめ

牧畜民の定着化に伴う居住環境の変化を考察すると、まず、移動放牧の形態分析より明らかとなった牧地の利用変化がある。また、その変化が年間を通じたゲルとバイシンの使い分けに大きく影響していることが明らかとなった。これを以下にまとめる。

1) 共有地において季節を通じて頻繁に移動が繰り返されていた調査地では、1980年代の人民公社解体後、家畜の分配、1990年代の牧地使用権の再分配、2000年代の退牧還草政策等を経て、各世帯の牧地境界を明確に区分するようになった。その為、各世帯が放牧で利用できる牧地の範囲は数十～数百km単位から、数km単位へと縮小している。これに伴い、固定化拠点やバイシンの設置が急速に進み、バイシン普及率は約100%となっている。

2) 牧地の使用権分配によって移動が制限された結果生じる問題として、牧草の維持と確保、分配後の人口増加、水源確保などがある。限られた牧地の中では、気候や地形条件、人口や家畜の過密等による牧草の悪化へ対応することが難しい。そこで、分配された牧地内においても井戸の位置や積雪、四季による牧草の状況を考慮した牧地の細分化、あるいは借用地を利用して放牧範囲の拡大を図る事例が多くみられる。このような対応が固定化拠点の位置選定に影響し、またバイシンが普及しているにも関わらず、短期から長期に渡るゲルの利用が盛んな要因となっている。

3) ゲルの利用状況を見ると、移動距離の縮小やバイシンの普及による使用期間の短期化、牧夫や単身での使用、鉄製ゲルの普及など、臨時的で簡易な仮住まいとして利用される傾向にある。一方で、上述2)の理由などにより、冬季や長期間の移動を行う場合もある。行事にも伝統的で格式の高い従来の木製ゲルが利用されることが多い。当該地域においては定着化に伴いゲル利用の縮小・簡易化傾向と伝統的ゲルの保有・活用傾向が同時に確認できる。

5-2. 今後の課題

本論では、年間を通じたゲルとバイシンの利用実態をみるなかで、定着化の象徴でもあるバイシンの具体的な利用状況については触れていない。他地域と比較しても短期間でゲルからバイシンへの移行がみられるこの調査地で、牧畜民の居住環境がどのように変化しているのか、バイシンの間取り変化等も含めて次報にて分析する。

本研究は、財団法人 住宅総合研究財団の助成を受け実施した「中国内モンゴル自治区東ウジムチンにおけるゲルの調査（代表：中山徹）」による研究成果の一部である。

謝辞

本調査は、内蒙古大学蒙古学学院のパヤモンド学院長、内蒙古婦女幹部学校オドンゲレル副教授をはじめとする現地コーディネーターの方々には多大なる御協力を頂いた。また、奈良女子大学文学部武藤康弘准教授、同生活環境学部山本直彦准教授、同大学院博士前期課程（当時）芦田奈緒さん、東京外国語大学谷弘萌さんには、現地調査において御協力頂いた。ここに記し、感謝の意を表したい。

参考文献

1) 松川節：移動と定住のはざまで、佐藤浩司編：住まいつむぐ、学芸出版社、p196、補注2より、1998

- 2) 包慕萍：モンゴルにおける都市建築史研究―遊牧と定住の重層都市フフホト、東方書店、p.39、2005
- 3) 野村理恵・中山徹・今井範子・室崎生子・姫茹・咏梅：定住生活における移動住居ゲルの利用実態と用途変化―中国・内モンゴル自治区シリンゴル盟の牧畜民を事例として―、日本建築学会計画系論文集、第73巻、第630号、pp.1735-1742、2008.8
- 4) 东乌珠穆沁旗志编委会编：东乌珠穆沁旗志（上）、内蒙古人民出版社、2001
- 5) 锡林郭勒盟志编纂委员会编：锡林郭勒盟志、内蒙古人民出版社、1996
- 6) 齐伯益 主编：锡林郭勒盟畜牧志、内蒙古人民出版社、2002
- 7) 小長谷有紀：モンゴル草原の生活世界、朝日新聞社、1996
- 8) 小長谷有紀：定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営―シリンホト市内の事例から、現代中国の民族と経済、世界思想社、2001
- 9) シンジルト：中国西部辺境と「生態移民」、小長谷有紀・シンジルト・中尾正義：中国の環境政策 生態移民、昭和堂、p.14、2005
- 10) スュー：「生態移民」による新たな草原開拓―内モンゴル自治区シリンゴル盟鍾黄旗における牧畜民の事例から―、小長谷有紀・シンジルト・中尾正義：中国の環境政策 生態移民、昭和堂、p.78、2005

注

- 注1) モンゴル語のゲルは家屋一般を指す普通名詞、また部屋を表わす言葉としても用いられる¹⁾。しかし、狭義には移動式天幕住居を指し固定式家屋バイシンとは区別される。本稿では、移動式天幕住居を指す言葉として用いる。
- 注2) バイシンはモンゴル語で「土や煉瓦、木や石で建てられた動かない家、あるいはとがった屋根を持つ家」という意味である²⁾。漢語では「板升」と表記するが、語源については漢語・モンゴル語双方の説がある。本稿では、日干し煉瓦造や煉瓦造の固定家屋について「バイシン」と表記する。
- 注3) 平成18(2006)年度科学研究費補助金（基盤研究A、代表：今井範子、課題名「中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活様態と居住空間に関する総合的研究」）による調査で、結果は参考文献3)にまとめた。
- 注4) 「盟」とは地級行政区に相当し、モンゴル語ではアイマグ *aimag* と呼ぶ。盟と同レベルの行政区として「市（盟級市）」がある。「旗」は県級行政区に相当し、モンゴル語でホシヨ *xosiyu* と呼ぶ。「鎮」はモンゴル語でバラガス *balgasu* と呼ぶ。郷に相当する行政区で、同レベルには「ソム *sumu*」がある。「ガチャ *γačay a*」は村に相当する。
- 注5) 1949年以前、商人や資源開発労働者等の流動人口を除くと、漢族の定住者はいなかったとされている⁴⁾。その後徐々に増加しているが、2009年時点で東ウジムチン旗はシリンゴル盟のなかで最もモンゴル族比率の高い旗である。
- 注6) 調査を実施した2008年は北京オリンピック開催時で、国境付近となる調査地では外国人の観光目的以外の立ち入りに制限があった。そこで、第一次調査前半には政府関係者同席のもと調査を実施した。その後はガチャの住民同士の紹介によって調査世帯を確保した。
- 注7) 聞き取り調査はすべてモンゴル語で行い、それぞれ日本語⇄モンゴル語の通訳を入れている。第二次調査以降、一部においては通訳を入れず、漢語を併用している。聞き取り項目は家族の基本属性、放牧形態、居住歴、ゲルやバイシンの使用状況等である。実測調査は第一次調査のみ配置図もとっているがその他はゲル及びバイシンの平面図についてコンベックスやレーザー距離計を用いて実測した。
- 注8) シリンゴル盟では、1980～1984年の間に人民公社で管理していた家畜を世帯単位に分配した⁵⁾（包产到户）。また、その後は段階的に牧地の使用・管理権も世帯単位に分配し、1989年には全盟で各世帯の牧地面積が確定した（畜草双承包）。1997年には牧地の使用証も発行され⁶⁾、牧畜業は人民公社単位の共同経営から世帯単位の個人経営へと完全移行した。
- 注9) 「退牧還草」政策とは、中国の牧畜地域において実施されているもので、事業内容は主に「禁牧（一定期間、放牧することを完全禁止すること）」、「休牧（牧草が萌芽から結実するまでの期間内において放牧を停止すること）」、「区画輪牧（自然状況や人為的判断に基づき牧草地をいくつかの単位に区切り、順次牧草地をかえて放牧すること）」の三つに分類できる⁹⁾。シリンゴル盟でも「囲封転移戦略」として、牧畜地域における退牧還草の適用と牧畜民の第二・第三産業への転職促進、牧草地の集約経営の推進等が行われている¹⁰⁾。
- 注10) モンゴル族牧畜民は伝統的に、常設の住居としてのゲル以外にも、臨時的な放牧（オトル）に用いる仮設の住居を用いることがある。世帯全員が居住するゲルよりも簡易で、少人数用になることが多い。本論ではこれらも放牧用の住居として包括的に捉え、ゲルとともに取り上げている。
- 注11) このようなゲルは各地で呼び名が異なる。調査地では、ジャラントブ *jaran an tobo*（ハリネズミの巣）と呼ぶ。

（2009年11月10日原稿受理、2010年5月13日採用決定）